

# 大学院進学体験記

青木 理紗（文学部史学科）

## はじめに

私は平成 28 年度より慶應義塾大学文学研究科図書館・情報学専攻に進学することになりました。後輩の参考になるかもしれないと思い、ここに私の経験を記しておきたいと思います。

## 大学院進学を目指すようになった経緯

そもそも私は司書として図書館で働くことを目指し、秋まで普通に公務員試験の就職活動をしていました。そのため秋までは大学院への進学は頭の中に選択肢として全くありませんでした。地元の県の司書卒を受験したのですが、後わずかのところで不採用となってしまう、今後進路をどうするべきか、これまでのように図書館関係の道を目指すか、それとも図書館とは離れて一般企業の秋採用で就職活動を行うか、と改めて考えた時に大学院という選択肢が出てきた形です。

私は幼少の頃より図書館で働きたいと考えてきていたため司書の道を諦めきれず、まずそこで図書館業界から離れずにいようと決めました。その上で今の自分に考えられる選択肢は、非正規雇用で図書館スタッフとして働くこと、そして図書館学を修めることのできる大学院への進学の二つでしたが、この先、図書館スタッフとして働くことはできるが、図書館について学問的にしっかりと学ぶことのできる大きな機会はこれが最後だろう、と考えたことが、私が大学院の受験を決めた最大の理由です。

## 合格まで

### ①研究計画書の作成

私がまず受験への準備として始めたこととしては、研究計画書の形を整えることです。大学院受験に際して、ほとんどの大学で研究計画書の提出が求められると思います。

自分がどのような分野に興味を抱き大学院進学後どのような研究をしたいのか、ということをおまかに書く必要があります（慶應の場合は 2000 字前後でした。各大学で異なると思います）。もう少し具体的には、研究テーマ、そのテーマを選んだ理由や動機、その分野が先行研究で触れられている範囲とそれを踏まえ自分の研究が持つ独自性、院進学後そのテーマについてどのようにアプローチしていくのかなどといったことを纏めます。

これがいい加減だとたとえ学科試験を通過しても面接で穴を突っ込まれ、ただモラトリアム延長のために何となく受験しに来た学生だと思われるので、ここは先生に見てもらいながら推敲を重ね、しっかりとしたものを作るべきだと思います。私はひと月くらい、7 度にわたり修正したものを最終的に大学院の方に提出しました。

### ②受験勉強

#### ・学科

科目も大学院によって異なりますが、慶應では図書館情報学と英語の試験が課されます。過去問は大学院が公開していることが多いので、ホームページや入試課で確認し、それを基に各自が試験対策を行うこととなります。慶應の試験は基本的なことが幅広く問われるので、日頃の授業を真面目に受け、試験前にしっかりと勉強をすれば必要以上に恐れる必要はないと思います。

また学校の司書課程で受講してきたテキストやレジュメが非常に役に立ちました。まずどこを基本として押さえるべきかをそれらで確認してから過去問をやるのでもよいと思います。ただ現実から目を逸らしてテキストにばかり逃げていると過去問対策の時間が取れないなんてことになってしまうのでそこは注意が必要です。

英語の試験は、院で英語の論文を多々読むことになるのでそれに足る英語力があるかを見ていると思われます。私の時に出题された問題は図書館情報学に関連する英文の日本語訳のみでした。単語の正確さよりも文型が適切に取れると得点に繋がりがやすいようです。ただ辞書は持ち込み不可なので最低限の英単語力もなしでいけるかと言われるとそんなことはないと思います。私は大学や TOEIC を受験した際に使った単語帳を引っ張り出して移動中の電車でさらい直していました。また図書館系及び情報系の専門用語を覚えていると大分読みやすいと思います。

## ・面接

面接は、白状すると学科試験を通過した後に対策を始めましたがどうにかかりました。決して参考にしないでください。基本的に志望動機や研究計画書に基づいて質問されるので、自分の提出した書類を試験前に再度読み込んで、質問を予想して、回答を作成して、という行程を繰り返して面接を迎えました。私の場合は試験前に一度、担当志望教授の方とお会いして志望動機を確認されていたため、それについてはそれほど聞かれず、研究計画書からの質問の方が多かったです。

私は他大学から、更に言うならば史学科からの受験でありました。つまり図書館情報学の「研究」に関わるのは大学院が初めてであり、加えて史学のそれと研究の形が大きく異なるため、その違いを乗り越える力があるかの確認を目的とした質問が主でした。図書館系の論文や本をどれ程読んだことがあるか、英語は大学でどれ程触れてきたのか、など、これまで私が何をしてきたかを特に問われることとなりました。

また筆記試験の手応えや選択問題で何故その問題を選んだのか、といったことも聞かれたのが個人的に最も予想外の質問でした。その際、作成した答案の間違いについても指摘されましたが、落ち着いてどのように考えてその答えを導いたのか答えたら深追いはされず、正しい知識を教えてくださいました。

面接においてはとにかく落ち着いて答えることが一番だと思います。頭の中でこう答えようと決めてからでも遅くはなく、むしろ慌てて適当に答える方が悪印象になるのだろうということが感じられるような面接でした。

## ・その他の受験準備

春期入試に向けた大学院入試説明会はおおよそ 11 月から 12 月頭に各大学で開催されているので迷ったらまず足を運んでみることをおすすめします。そこでしか手に入れない大切な情報があったりします。慶應では出願前に担当を希望する教授にメールを送る必要があるのですが、それが知らされたのは説明会中、口頭でのことでした。

また、先生方には恥ずかしさを押しのけ、遠慮をせず頼るとよいと思います。私は大学院への進学を考えてすぐ、立教大学の学校・社会教育講座でお世話になっていた中村百合子先生のもとへ相談に向かいましたが、そこから合格を決めるまで、文章では書きつくせないほどお世話になりました。ためになるアドバイスを沢山くれることと思います。

そしてこれは学科によると思いますが、卒業論文はなるべく書いておいた方がよいです。大学院の春期入試出願のためには、卒業論文あるいはそれに準ずる論文が必要です。史学科

は必須ではなかったため私は卒業論文を取っておらず、受験を決めた時点で出願のための論文がなく、端的に言うと約ひと月で、3年次に書いた卒業予備論文を論文の形にブラッシュアップすることになりました。地獄を見ました。大学院入試の準備でこれが一番きつかったです。少しでも院への進学を視野に入れているならば卒業論文は取っておくべきです。

### おわりに

このように秋からどたばたと準備をし、受験をした私ですが、結局これまで司書課程で培ってきた知識と経験が自分を合格に導いた最大の要因であるように思います。日頃から図書館について前向きに興味関心を抱き、油断せず勉強をすれば決して秋から準備して春期の院試合格はべらぼうに難しい、ということはないと、全てが終わった今、感じています。大体の学生が内定をもらい進路を決めている中での準備は精神的に決して余裕があるとは言えないでしょうが、最後まで突き進み、自分の納得いく結果を得ることができたなら何よりのことと思います。

最後に、大学院入試を改めて振り返る機会をくださった、そして合格まで私を支えてくださった中村先生に、心よりの感謝を述べて、体験記を終えたいと思います。本当にありがとうございました。